

遠くで鳴る雷

小川未明

青空文庫

二郎は、前の圃まへはたけにまいた、いろいろの野菜やさいの種子たねが、雨あめの降ふつ
 た後あとで、かわいらしい芽めを黒土くろつちの面おもてに出だしたのを見みました。
 小ちいさなちようの羽はねのように、二つ、葉はをそろえて芽めを出だしはじ
 めたのは、きゅうりであります。

そのほかにもかぼちや、とうもろこしの芽めなどが生はえてきまし
 た。

きゅうりは、だんだんと細ほそい糸いとのようになつるを出だしました。お
 母かあさんは、きゅうりの植うわつているところに、たなを造つくつてやり
 ました。たなといつても、垣根かきねのようなものであります。それに、
 きゅうりのつるはからみついて、のびてゆくのであります。

やがて、ほかのいろいろな野菜やさいの芽めも大きくなりましたが、いつしかきゅうりのつるは、その垣根かきねにいつぱいにはいまわつて、青々あおあおとした、厚みあつのある、そして、白いしろとげのようなうぶ毛げをもった葉はがしげりあつたのでありました。

そのうちに、黄色きいろの、小さいちいな花はなが咲さきました。その花はなのしぼんだ後あとには、青あおい青あおい、細ほそ長い実みがなつたのであります。

二郎じろうは、毎年まいとし、夏なつになると、こうしてきゅうりのなるのを見るみるのでありますが、その初はつなりの時じぶん分ぶんには、どんなにそれを見るみるのが楽たのしかったでしょう。

「もう、あんなに大きおおくなつた。」と、彼かれは、毎日まいにちのように、家うちの前まえの圃はたけに出でては、きゅうりの葉蔭はかげをのぞいて、一日いちにちましに大おお

きくなつてゆく、青い実を見ては、よろこんでいたのであります。いくつもきゆうりの実はなりましたが、その中に、いちばん先になつたのが、いちばん大きくみごとにできました。

「お母さん、きゆうりがあんなに大きくなりましたよ。」と、二郎は、外から家の内に入ると、毎日のように母親に告げました。

「ほんとうに、いいきゆうりがなつたね。」と、お母さんはいわれました。

二郎は、そのきゆうりがよくてよくて、しようがありません。毎日それに、さわってみては、もいでもいい時分ではないかと思つていました。

ある日ひのことでありました。お母かあさんは、二郎じろうに向むかつて、

「二郎じろうや、あの大きおおくなつたきゆうりをもいでおいでなさい。つるをいためないように、ここにはさみがあるから、上手じょうずにもいでおいで。」といわれました。

二郎じろうは、さつそく圃はたけへと勇いさんでゆきました。そして、はさみを握にぎつて、葉蔭はかげをのぞきますと、そこに大きおおなきゆうりがぶらさがつています。

二郎じろうは、なんとなくそれをもぐのがしのびないような、哀あわれなような、惜おしいような氣きがしてしばらくそこに立たっていました。

二郎じろうは、ぼんやりとして、夢ゆめのように、きゆうりが芽めを出だしたばかりの姿すがたや、やっと竹たけにからみついて、黄色きいろな花はなを咲さかせた時じ

分ぶんを思おもい出だすと、ほんとうにこの実みをつるから切り離はなすのがかわいそうでならなかつたのです。

二郎じろうは、チヨキンときゆうりをもぎました。そして、それを鼻はなにあてて匂においをかいだり、もつと自分じぶんの目めに近づちかけて、このいきいきとした、とりたての、新あたらしい青あおい実みをながめたのであります。「お母かあさん、これをどうして食たべるの？」と、二郎じろうはたずねました。

「まあ、みごとな、いい初はつなりですね。これは食たべるのではありません。おまえが、釣つりにいったり、泳およぎにいったりするから、水すい神じんさまにあげるのです。」と、お母かあさんはいわれました。

二郎じろうは、それを聞きくと、なんだか惜おしいような気きのうちにも、

ひとつのさびしきを感じたのであります。

「水神さまは、きゆうりをたべなさるの？」

「きゆうりは、ぶかぶかと流れて、遠い遠い海の方へいつてしまうのですよ。それでもおまえの志だけは、水神さまに通るのです……。」と、お母さんは哀れっぽい声でいわれました。

二郎は、自分の名をそのきゆうりに書きました。きゆうりの青いつやつやとした肌は、二郎の書こうとする筆の先の墨をはじきました。それでも、二郎は、何度となく筆で、その上をこすって字を書きました。

「お母さん、よく書けません、これでいいですか。」と、二郎は、きゆうりを母親に示しました。

「おお、いいとも、いいとも。それをおまえは持っていて投げておいで。」と、お母さんはいわれました。

二郎は、きゆうりを持って、いつも自分たちのよく遊びにゆく河の橋のところへやってきました。ちょうど雨上がりで、水がなみなみと岸にまであふれそうにたくさんでありました。そして悠々と流れていました。

両岸には草や雑木がしげっていました。

二郎は、ドンブリと橋の上から、手に持っていたきゆうりを水の上に落としました。きゆうりは、浮きつ、沈みつ、二郎が欄干につかまって見ている間に、下の方へと流れていってしまいました。

二郎は、この日、家に帰つても、きゆうりのことを思い出して、さびしそうにしていました。

「いまごろは、どこへいったらう？」

二郎は、あてなく、きゆうりの行方を思っていたのです。すると晩方の空が晴れて、かなたには夏の赤銅色の雲がもくもくと、頭をそろえていました。そして、遠くの方で、雷の音がしたのであります。

二郎は、寝るときもきゆうりのことを思っていました。しかし、床に入るとじきに寝入ってしまった。

その間、きゆうりは、水に、流れ、流れて、夜の間に、森のかけや、広い野原や、またいくつかの村を通り過ぎて、夜の明けたこ

ろにはもはや幾里いくりとなく遠くとおへいってしまつたのです。そして、まだ、そのうえにも、きゆうりは、旅たびをつづけていました。

その日の午後ひごごでありました。一人ひとりのみすぼらしいふうをした乞食こじきの子が、低い橋ひくはしの上に立たつて、独りひとりさびしそうに、流ながれてゆく水みずの上を見みていました。水みずには、雲くもの影かげと草くさの葉はの影かげが映うつつていたばかりです。

そのとき、一つのきゆうりが、ぶか、ぶかと流ながれてきました。子供こどもは、棒ぼうを持もつてきて、あわててそのきゆうりを拾ひろい上げました。きゆうりに書かかれた文字もじは、すつかり水みずに洗あらわれて消きえていました。

けれど、遠とおい、遠とおい、水みな上かみから流ながれてきたことだけは、乞食こじき

の子にもわかりました。なぜなら、まだ、このあたりは、風が寒くて、きゆうりの芽がそんなに大きくはならないからです。

乞食の子は、そのきゆうりを手にとつて、大喜びでした。

さつそく、これから母や妹に見せようとあちらに駆け出してゆきました。

この日、はじめて、山のあちらに、雷の鳴るのを子供はきいたのであります。子供はふと途の上に立ち止まって、耳を傾けていました。北の方にも、夏がやってきたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「遠《とお》くで鳴《な》る雷《かみなり》」
となっております。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2014年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

遠くで鳴る雷

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>